



こどもの民話

えすがたにようぼう

ぶん・今江祥智

え・赤羽末吉



こどもの民話

NDC913

えすがたによ うぼう

ぶん・今江祥智

え・赤羽末吉

1970年1月10日 発行

発行者 田中博之

印刷所 株式会社 東京印書館

発行所 盛光社

東京都千代田区富士見2の12の2

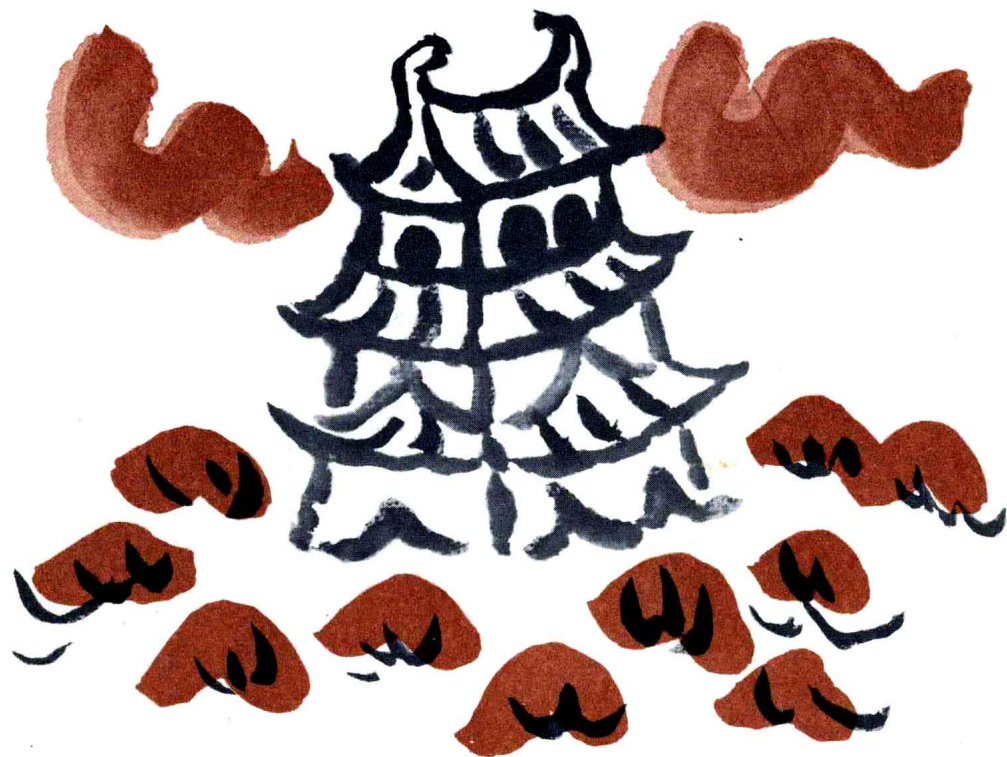
TEL(265)4781-5・振替東京46874

Printed in Japan

こどもの民話

えすがたにようぼう

ぶん・今江祥智 え・赤羽末吉



盛光社

とんとんむかし、
ある村に、門太と
いうわかものが
あさからばんまで、
それはそれはよく
はたけのせわを
したから、門太の
はたけはどこよりも
みごとだった。



けんど

門太^{もんた}は

ほんとに

氣^きが よわく、

—そげに

はたらいて

ばっか

おらんと

そろそろ

にようぼうでも

さがすと

いいに……

などと

いわれても

—いんや、

おれみてえな

ひやくしようどこへ、

きて

くれる

女^{おんな}は

おらん。

と、

かたく

くびを

ふる

ので あった。





ところが ある日の ゆうぐれの こと。
門太^{もんた}が はたけから もどって きよると、
だれやら みちばたに しゃがんで おる。
ちかよって みると、それは それは
きれいな ねえさまで あった。

門太^{もんた}は もう

ぼうつと あがつて

しまい、口を きく

どころでは なかった。

が、ねえさまが あんまり

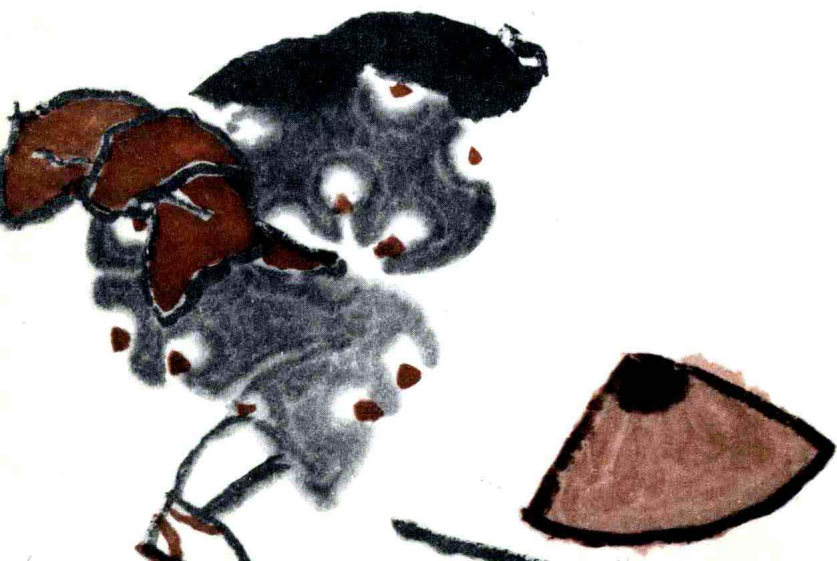
かなしそうなので

とうとう

—— あんた、あんべえでも

わるいかね。

と、きいて しまった。



すると ねえさまは、
だまって わらんじを
ぶらんと さげて みせた。
はなおが きれて いた。
なんだ、そんな こと
だったのか、と こしに
手を やったが、
いつもの 手ぬぐいが
ない。そこで あっさり
じぶんのを ぬいで
さしだした。



—ちつとばか、
大きすぎるかも
しんね。
ねえさまは、
ぽっと わろうて
そいつを はいて
くれた。



門太^{もんた}が　ぺたぺた・

あるきよると、

ねえさまも　ついて

きて、いえに　つくど

こう　いいよる。

―あんたは

心^{こころ}が　やさしいで、

わしを　よめに

して　くれんか。

門太^{もんた}は　もう

ぽわぽわっと　なるくらい

うれしくて、だまって

大きく　うなずいた。



ねえさまは、また、

ぽうっと わろうた。

ゆうぐれの なかで

ぽうっと 白い

ねえさまの かおを

みて、門^{もん}太は

（おら、

ゆうがおの

花みてえな

にようぼうを

もろうたぞ！）

と、さけびたい

きもちだった。





さて あくる日、

門太^{もんた}は あさから えらい

いきおいで うねうちを

はじめたが、お日さんが、

ことりとも うごかん

うちに、いえに もどって

きて しまいよる。

にようぼうが 氣^きに

なって 氣^きに なって

おちついて はたけに

なんぞ おられん

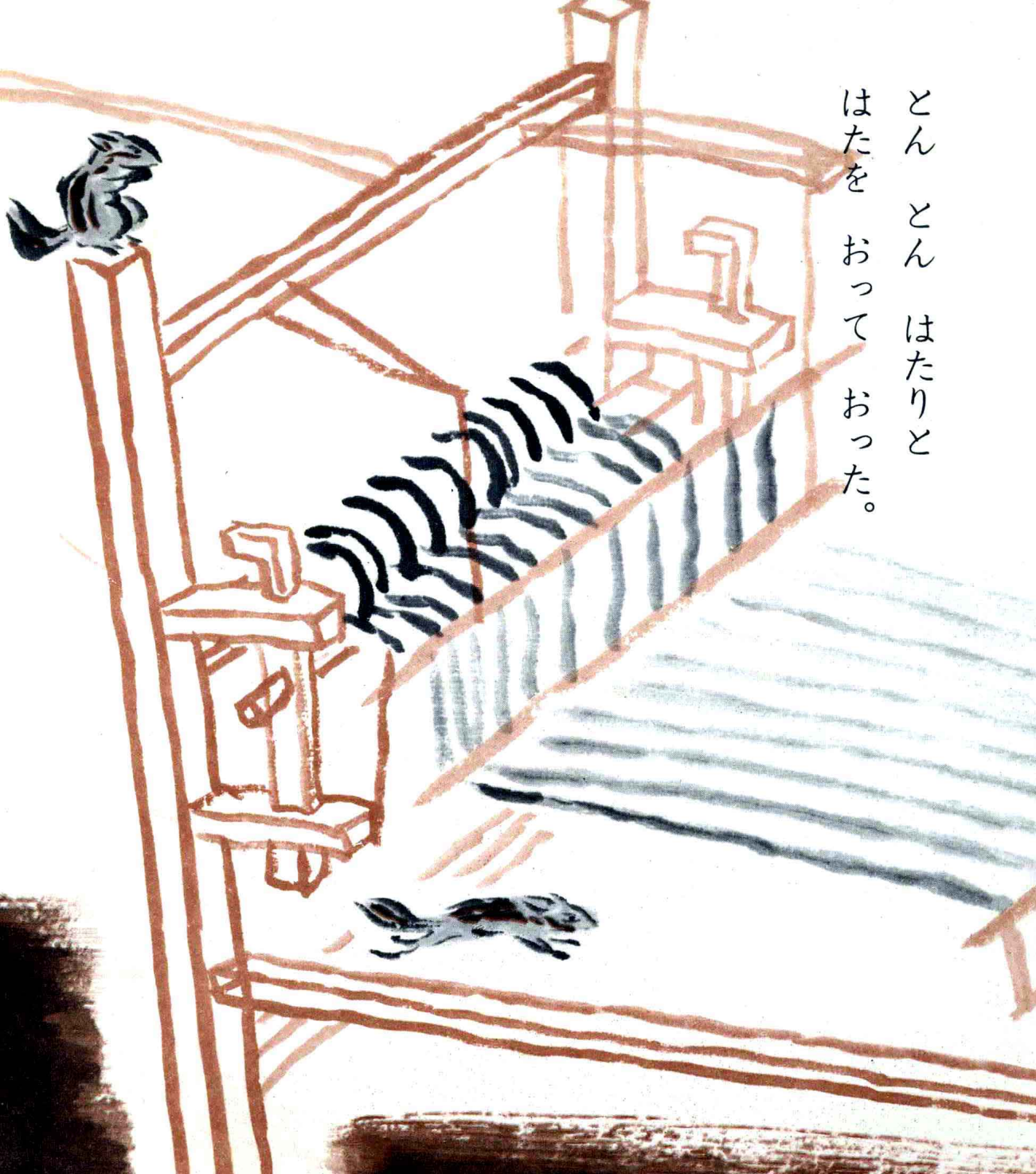
かったので ある。

けんど にようぼうは

ちゃんと うちに いて



とん とん はたりと
はたを おって おった。



門太^{もんた}は ほっとして
はたけへ もどったが、
また ひどうねも
うたぬ うちに、
いえへ もどって
しまった。

に ようぼうは、

ちゃんと おる。

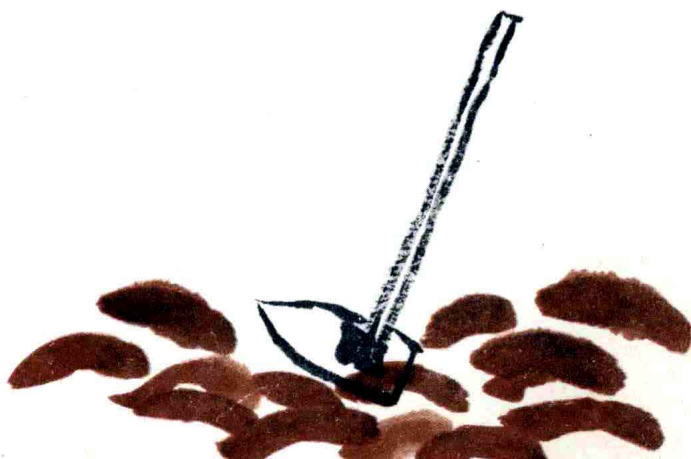
門太^{もんた}は ほっと して

はたけに もどったが、

ほんの ちょんびり

すると、もう 足が

むずむずして きて、



どうしても
いえの ほうへ
あるきだして
しまうので ある。





これでは

しごとに ならない。

そこで にようぼうは、

しばぐりを かりんと

わって たべながら、

ちつどの ま

かんがえて いたが、

やがて、こう ささやいた。

—— わしの すがたを、

えに かい て もらうと

ええに。

そして まちへ でかけて、

えかきに、 えすがたを

かい て もらうて きた。